西日本新闻 文化版

1988 年九月二十六日~十月八日

从漫长的沉默中挣脱出来…

击败评论家

在大牟田市经营画塾“西部美术学园”的働正，曾被誉为“九州派的理论家”。面对働正那套晦涩难懂的理论长篇大论，连那些难以理解其中真意的成员们也对他肃然起敬。

在前往东京展览的列车上，他曾上演过双手反绑滚落过道、全身裹绷带横卧福冈市繁华街头的闹剧。就在九州派濒临瓦解之际，他毅然脱离了团体。试图为运动建立理论体系却遭误解，最终孤立无援地离去。他虽不愿多言，但内心的挣扎似乎深深刺痛了年轻人的心灵。自此之后，成员间的交流几乎中断。

那套粉碎同伴作品的逻辑，同样禁锢了自身的创作。仿佛要逃离九州派时期的自我，他沉溺于画塾的教育体系。直至近二十年后，才重新萌生绘画的念头。

今年九月二十五日，福冈市美术馆举办九州派展研讨会。作为讨论嘉宾出席的工（Toru）羞涩地说：“我哪算什么理论家。”美术评论家针生一郎却揭露道：“他太谦虚了，当年可是把评论家们吊起来打呢。”看来工的言辞相当犀利。

在传习馆斗争中

我也曾认为“艺术与否无关紧要，只要是通过共同创作探索人类本质的运动就行”。这种想法并未被理解，反而曾被指责“理论先行而作品匮乏”。与同伴的隔阂加剧了空虚感，甚至滋生出近乎亲人相厌的情绪。

安保斗争虽曾高涨，但落幕后众人终究各自回归家庭。当高涨情绪消退，九州派便认为使命已尽，就此决裂。

四十年前，工移居至大牟田市。当时大牟田前卫团体“新艺术集体”的成员谷口利夫（现居福冈市）加入九州派后，委托工打理他创办的西部美术学院。“本打算只帮忙谷口先生赴美的一年间。“然而他并未成行，反而在福冈市创办了新西部美术学园，于是我便接手了学园事务。”

邻近大牟田的柳川市爆发了反对教职员处分令的传习馆抗争。正值此时的 1970 年，与九州派保持若即若离关系的北九州市团体“蜘蛛”成员，因高举绘有生殖器图案的草席旗帜被警方带走。九州派数人曾提供支援，但最终坚守至最后的，是担任特别辩护人、持续刻制油印机版面发行小册子的阿多。这场高举“表达自由”旗帜的斗争终告失败，阿多被判有罪。他再度沉溺于画塾事务。

专注于儿童绘画

工的画塾以重视个性、指导符合年龄的绘画而非追求技巧精湛为特色，盛况空前，五十年前后学员已逾百人。虽然曾在儿童画展上获得团体奖，但工内心却产生了质疑：这样真的好吗？他意识到必须改变现代儿童只知服从指导却缺乏自主思考与行动力的现状。

1975 年，他带领十名小学生完成版画绘本《沉睡海中的龙》。以大牟田大蛇山祭典与三池地区传说为素材，孩子们创作现代民间故事并亲手雕刻版画。历时两年，他们实地考察祭典与市内各处，收集传说故事，倾注心血完成这部作品。由工匠刻制油印版、孩子们亲手装订的五十一部手工绘本广受好评，同年由福冈市出版社正式出版。

在创作过程中，工匠不仅希望培养孩子们对故乡的热爱之心，更在潜移默化中激发了自身对艺术创作的热忱。恰逢出版前后，他开始了与纸张的全新对话。

重启创作活动

铅笔、粉彩与水彩交织出缤纷的直线，细密描绘的纹样与微小圆圈相互呼应，曼荼罗般的作品接连诞生。曾以“没时间画画”为由拒绝创作的他，如今在补习班之余甚至日绘十小时，仿佛昔日的拒绝从未存在。

历时一年的三十余件作品于 1986 年在福冈市画廊展出。这是自 1964 年东京内科画廊个展后时隔二十二年的首次个展。次年六十二年，他在熊本市举办个展。相较前一年，作品色彩与形态更趋多元，涌现出自由奔放的韵律感。近来他坦言：“仿佛感受到纸张在呼唤我。”

他正构思下一本手作绘本，题为《孩子们眼中的大牟田》：“将描绘游戏场景、父母工作、街巷风貌。或许需要十年光阴，但这期间我也将重获新生。”说着他展露明朗笑容。

前衛たちの軌跡

九州派から四半世紀

〈8〉

長い沈黙から 抜け出して…

働正(54)

〈大牟田市〉

評論家打ち負かす

大牟田市で画塾「西部美術学園」を主宰する働正（はたらき・ただし）は「九州派の理論家」と呼ばれていた。難解な論理を延々と展開する働に、意味がよく理解できないメンバーたちも一目置いていたという。

東京展に向かう列車内で、同手を後ろ手に縛って通路に転がったり、全身を包帯で巻いて福岡市の繁華街に寝転がるハプニングを演じた働は、解体直前の九州派を飛び出している。運動を理論づけようとして理解されず、結局は孤立して去った。多くを語りたがらないが、内部の葛藤は若者の心を深く傷つけたようだ。それ以降、メンバーたちの父親はほとんどなくなる。

仲間の作品を打ち外した論理は、自らの制作をも封じ込めた。九州派時代の自分から逃れようとでもするように、画塾での教育だけにのめり込んだ。絵を描こうと思うまでに二十年近い歳月を要する。

今年九月二十五日、福岡市美術館で九州派展シンポジウムが開かれた。パネリストとして壇上にいた働は「理論家だなんて」と照れた。美術評論家の針生一郎は「謙そんだ。評論家をつるし上げたもの」と暴露した。働の弁当は、相当に鋭かったようだ。

伝習館闘争にも

「芸術とは関係なく、共同作業で人間とは何かをさぐる運動でなければ」と思っていた。それは理解されずに、逆に「理論ばかりが先行して作品が少ない」と責められたこともあったようだ。仲間とのずれがむなしさを増幅した。近親憎悪に近い感情も生まれたのだろう。

安保闘争は盛り上がったが終わってみれば、皆、各人の家庭に戻っていった。高揚が止まった九州派は使命を終えた、と思い、決別した。

働は四十年に北九州市から大牟田に移った。大牟田の前衛グループ「新芸術集団」から九州派に加わっていた谷口利夫（福岡市）が主宰していた西部美術学園の面倒を見てくれと頼まれたのだ。「谷口さんがアメリカに行く一年間だけのつもりだった。だが彼は行かずに福岡市に新しい後を継ぐことになった」

アトリエの働正さん

大牟田に近い柳川市で教職員処分に反対する伝習館闘争が起きた。この最中の四十五年、九州派とつかず離れずで行動していた北九州市の集団「蜘蛛（くも）」のメンバーが、性器を描いたむしろ旗を掲げて警察に連行された。九州派の数人も支援したが、最後に残ったのは、特別非課人だった。働がガリ版を切り、子供たちが製本もした五十一部の手作り絵本は評判になり、その年、福岡市の出版社で本になった。

児童画に専念

うまく描くことよりも、個性を重視して年齢に合った絵を指導する働の画塾は盛況で、五十年ごろには百人を超えた。児童画展で団体賞を受けたりもするが、働の内面では、それでいいのかとの疑問が起きた。指導には従うが、自ら考えて行動することのない現代の子供たちを何とかしなければ、と思った。

六十年に小学生十人と版画による絵本「滝にねむる龍」を完成させた。大牟田の大蛇山祭りや三池に伝わる伝説を題材に、子供たちが現代の民話を創作、版画を彫った。祭りや市内各地の取材、伝説の聞き取りなど、二年がかりの労作だった。働がガリ版を切り、子供たちが製本もした五十一部の手作り絵本は評判になり、その年、福岡市の出版社で本になった。

押しつけでなく、子供たちに自分たちの心をとぎすます心を育てたいとも思いながら本作りを進めるうちに、働の内部にも制作への意欲が発酵してゆく。出版と前後して、紙と取り組み始めた。

制作活動を再開

鉛筆とパステル、水彩による、さまざまな色の直線が交錯し、細密に描き込まれた紋様や小さい円が響き合うマンダラのような作品が次々に生まれた。「描く時間がない」と制作を拒否していたのがウソのように、塾の傍らで日に十時間も描くこともあった。

一年がかりの三十余点を六十一年に福岡市の画廊で発表した。三十九年、東京・内科画廊以来二十二年ぶりの個展だった。翌六十二年、旅本市で個展。前年に比べて色彩や形が多様になり、自在なリズム感が生まれてきた。最近は「紙から呼ばれるような気配を感じる」と言う。

次の手作り絵本の構想もある。「子供たちの大牟田」と題して「遊び、父母の仕事、街の表情を考える。十年かかるかもしれないが、その間に私も立ち直る」と明るく笑った。

（吉田 浩記者）

‖敬称略‖

九州派展 10日まで、福岡市中央区大濠公園、福岡市美術館。